

37 山崎佐による第二次世界大戦期の日本医学史記述について

渡部 幹夫

順天堂大学

山崎佐(1888~1967)は日本医史学会の理事長を1942年から1953年まで務めた医事法制学者である。第116回の本学会総会にて演者は「昭和17年開催・第11回日本医学会総会の総会講演について」の中で、山崎佐の総会講演「日本医道と医学及外教(仏教, 儒教, 基教)との関係」を紹介した。今回は、『日本医史学雑誌』1943年3月28日号, 太田正雄編著『日本の医学』1946年刊行, 山崎佐著『医事談叢』1948年刊行を含めて, 山崎佐による第二次世界大戦期の日本医学史の記述を紹介したい。

太平洋戦争開戦前に準備されたと思われる第11回日本医学会総会講演は1942年3月に行われ, 会誌の発行は1944年7月である。この講演で「日本医道は元来, 政としてあり滅私奉濟神である。その後仏教の影響で博濟慈恵の古医道となり, 儒教により仁術としての新医道となった。明治以後の洋方医学では方術・手技だけであり医療精神などはないとの誤解が残り, 医道は著しく廃頽した。国家が医師に何を期待しているのか少しも窺い知れないようなところがあったが, 漸く国民医療法の制定に至った(要約)」と期待をもって運用に注意を喚起している。

1943年の日本医史学会理事長就任あいさつでは, 我が邦医学医方の伝統を探求してこれを鮮明にすることが必要であり, 国運を賭したこの民族自覚の千歳一遇の機に民間の学会としての使命があると述べている。

太田正雄編著『日本の医学』は第一部 山崎佐著「日本医学史概要(前期)古代より室町時代まで」(27頁), 第二部 太田正雄著「日本医学史概要(後期)室町時代より明治以後に至る」(61頁), 第三部 緒方富雄・小川鼎三著「現代の医学研究」(53頁)よりなる。太田正雄(木下柰太郎)は1945年10月食道がんにて没しており, 本著の多くの部分は大战中に書かれたと思われる。出版された経緯を発行所民風社の柳沢文秋は, 「本邦の医学教育において独立した医学史の講座を欠き, 学生の医学史研究の適当な入門書もない。この状態にかんがみ太田正雄, 緒方富雄, 小川鼎三, 高野六郎, 鶴見三二(ママ)の五名が相寄り昭和十八年以降戦争中ひそかに分担執筆がされた。編纂に盡力した国際文化振興会に太田正雄没後残された原稿から第四部 鶴見三二(ママ)著「日本医学の国際協力」, 第五部 高野六郎著「日本の医療行政」の部分のをぞいて発行した。敗戦を契機として日本歴史の科学的検討が提唱せられるようになり, 本書の意義は益々重要性を加え編輯を委託され, 第一部より第三部まで上梓した(要約)」と記す。本書は医学生に向けて書かれた簡明なものであり, 山崎は古代より室町時代までを担当した。総括として曲直瀬道三までたどり「曲直瀬は根本原理を朱子学に置くため, 江戸時代の朱子学と医学の緊密不離の関係が江戸中期まで永く我邦医学の主流となった」として太田正雄につないでいる。

1948年6月発行の『医事談叢』のはしがきに山崎は「私は諸書を渉獵して丹念に書き抜いてためた函が二十余年, まさに充棟していたが, そのうち使用したものは一割にも達しなかった。整理したいと思っていたが, 戦災で一塊の灰となってしまった。かような次第で本書の大部分は新たに執筆したものであって, 舊稿は僅にそれに補充したに過ぎない」としている。本書は, 逸事編11項, 医制編19項, 雑事編23項を合わせて374頁の小冊である。雑文集であるが37項に『脈机』の小文がありその中で, 大学を終え裁判所に奉職後も医事法制学を樹立したいと没頭したが, 所長に呼ばれて「直接裁判に関係しないものなど餘りやらぬ方がよからう」と忠告されたという。「医制を攻究するは志なり。法曹に携はるは業なり。志のために業を怠らず, 業の為に志を廃せず。志は達成すべく, 業は勉勵すべし」を座右銘としてきたとある。

戦争下の困難な時代に日本医史学会をつないできた先達の言として重いものを感じる。